01 卒業設計

開講年次：学部４年生

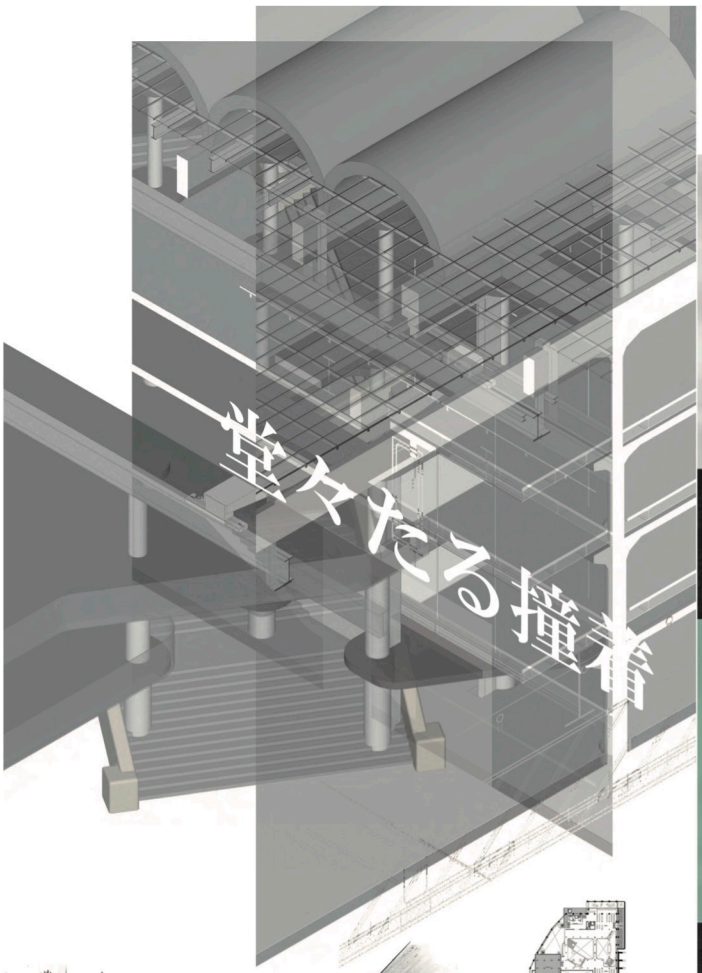
神戸大学建築卒業設計賞 大賞

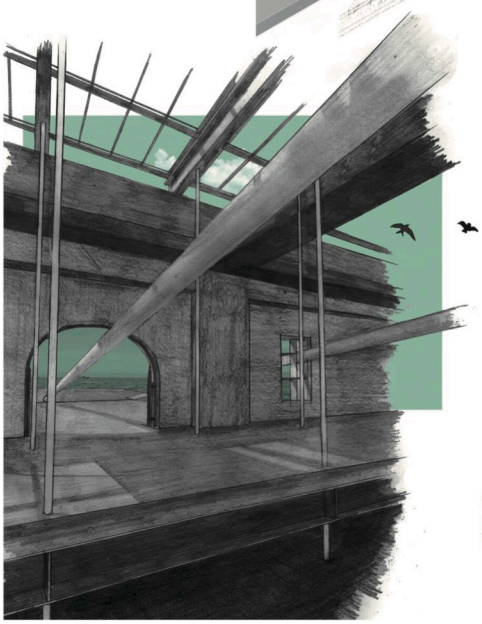
堂々たる撞着
- 港湾倉庫のコンバージョンによる公共図書館の設計提案

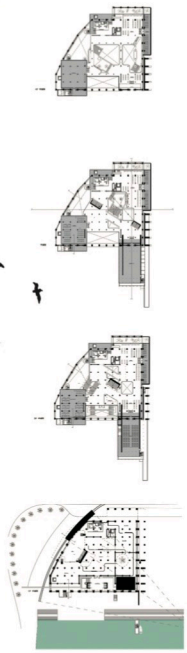
長央尚真（光嶋研究室）

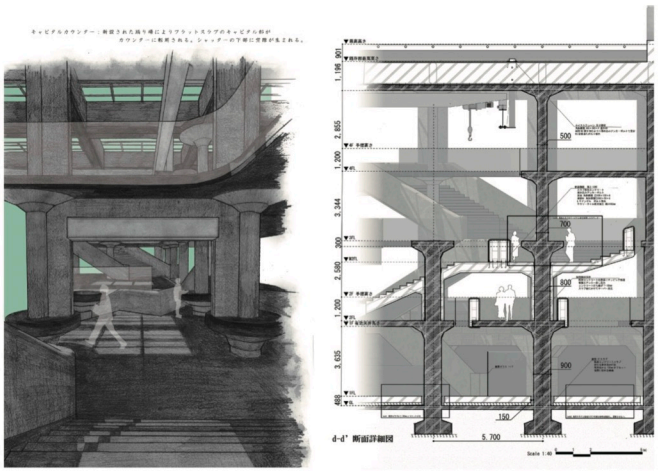
合理的に整備された都市空間と人間の欲や自然の力が交差したときに生まれる不可解な造形物がある。通常では起こりえない部材の勝ち負けにより人間らしい不完全さを感じる。その交差点では作為的な要素が失われ、新たなアフォーダンスが生まれる。海道や貨物駅などが交差する神戸新港エリアに佇む約築100年の港湾倉庫を設計対象とし、上記の部材の自己矛盾を積極的活用し、設計手法とする。

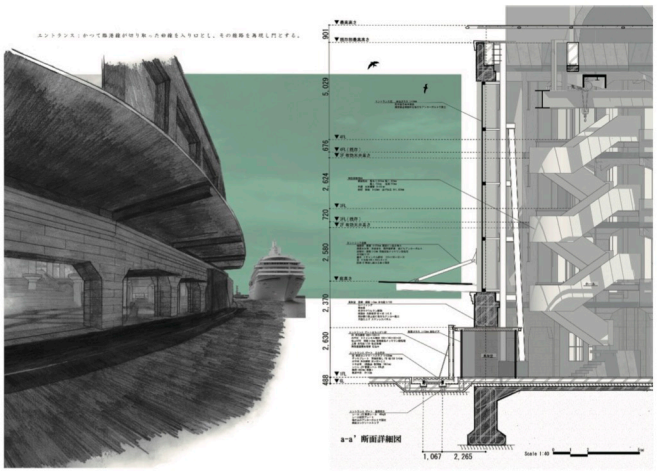
矛盾した造形物が堂々と佇む姿は美しく潔い。これを撞着語法に掛けて「堂々たる撞着」と私は呼ぶ。

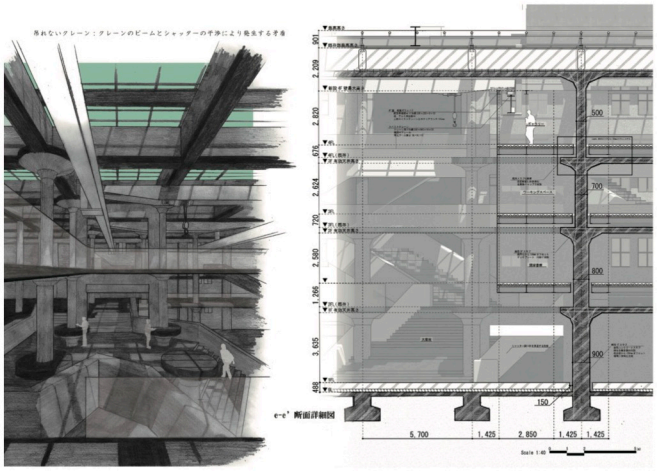


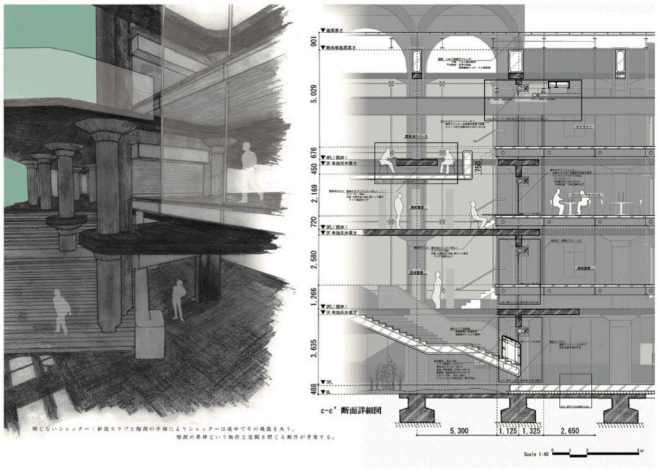


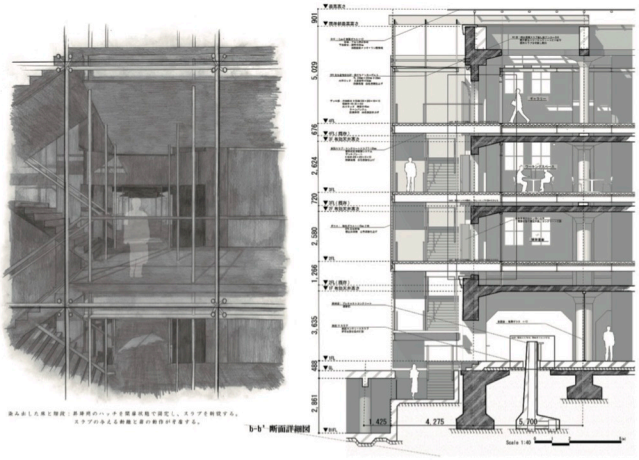


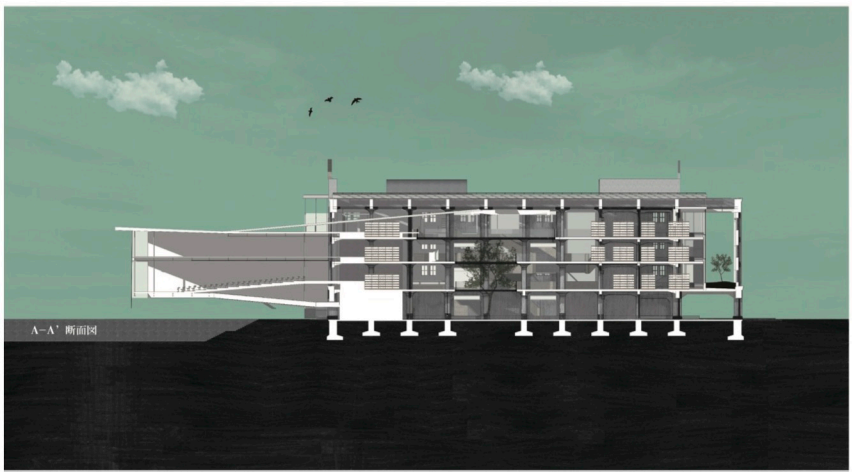

d-d' 断面詳細図
Scale 1:40

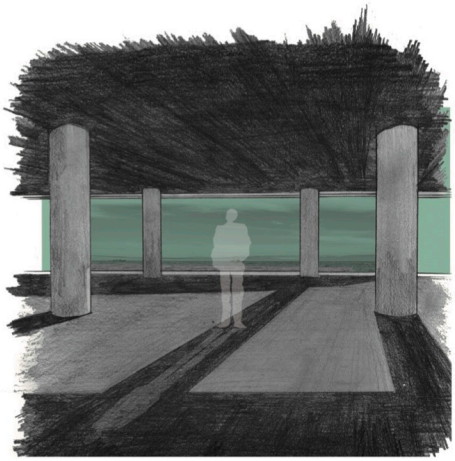

a-a' 断面詳細図
Scale 1:40


e-e' 断面詳細図
Scale 1:40


c-c' 断面詳細図
Scale 1:40


b-b' 断面詳細図
Scale 1:40


A-A' 断面図

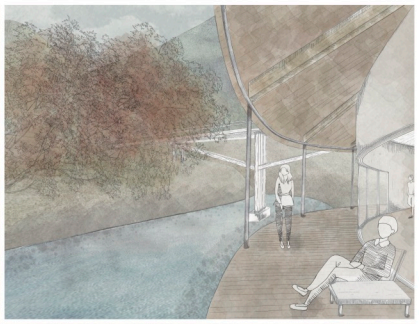


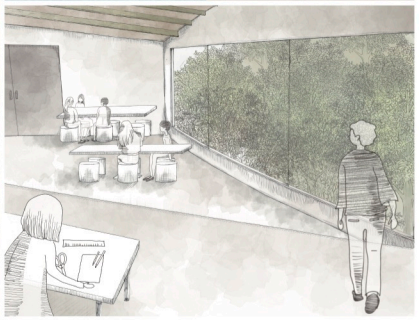
神戸大学建築卒業設計賞 大賞

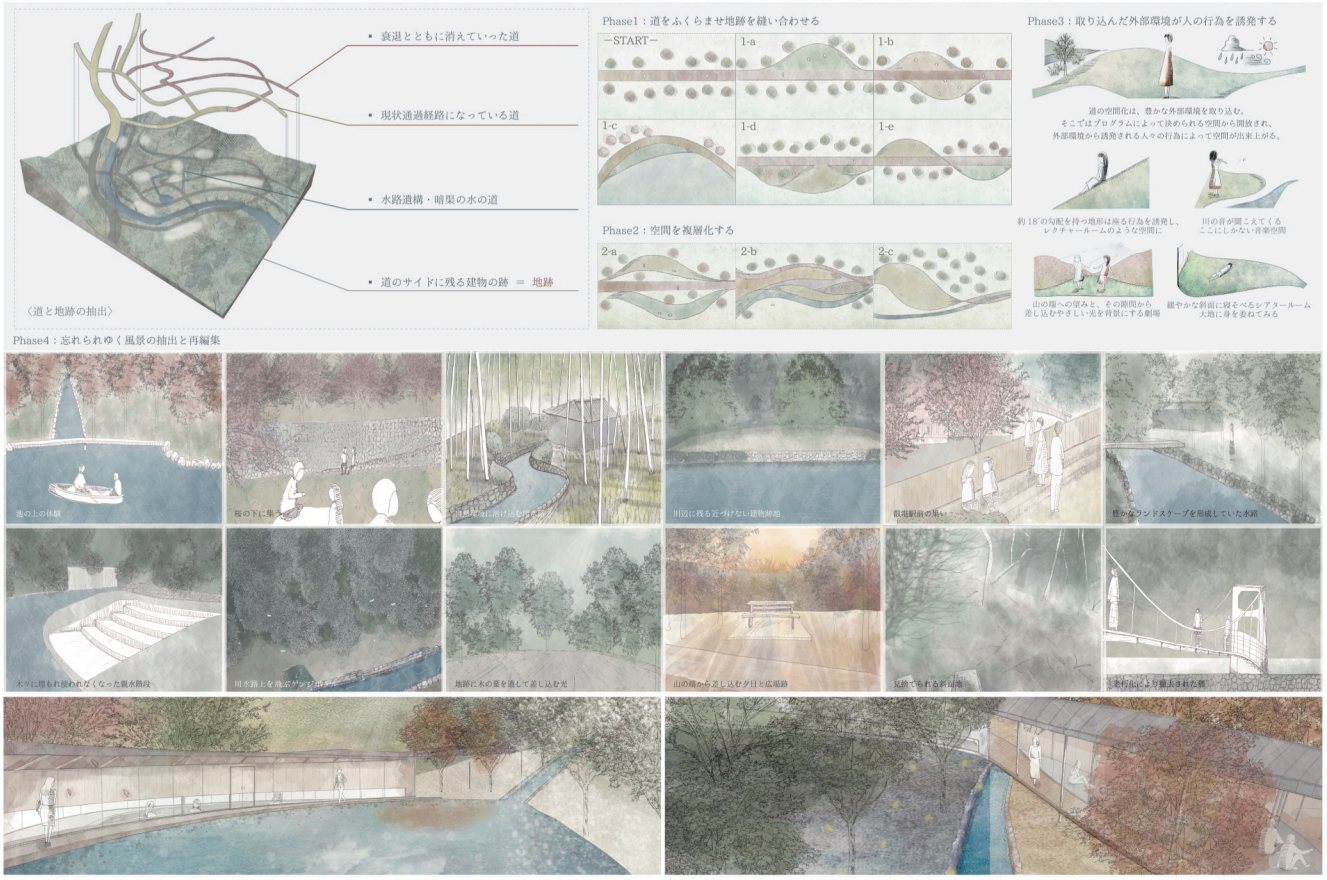
地跡を縫う
―忘れられゆく風景を再編集するフィールドキャンパス―

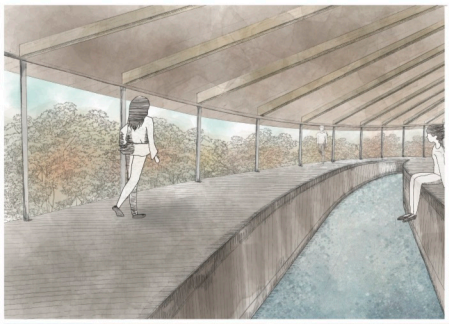
宮本莉奈（末包研究室）

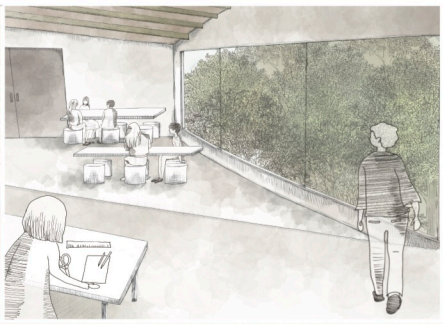
衰退する山間地域と均質に広がる都市の境界に位置する京都・八瀬。豊かな自然環境と人々が相互作用してつくってきたこの場所の記憶や風景は、近代化とともに薄れ、今では忘れられていくのみである。このままではこの場所は消えてしまうのではないか。過去地図から発見される消えゆく道と、かつての風景の中にこの場所の記憶の堆積を読み取り、道の空間化により新たな風景へと再編集を行う。今、私たちが忘れていく身体を通した体験に満ちたいくつもの場により、この地の新たな物語が始まる。



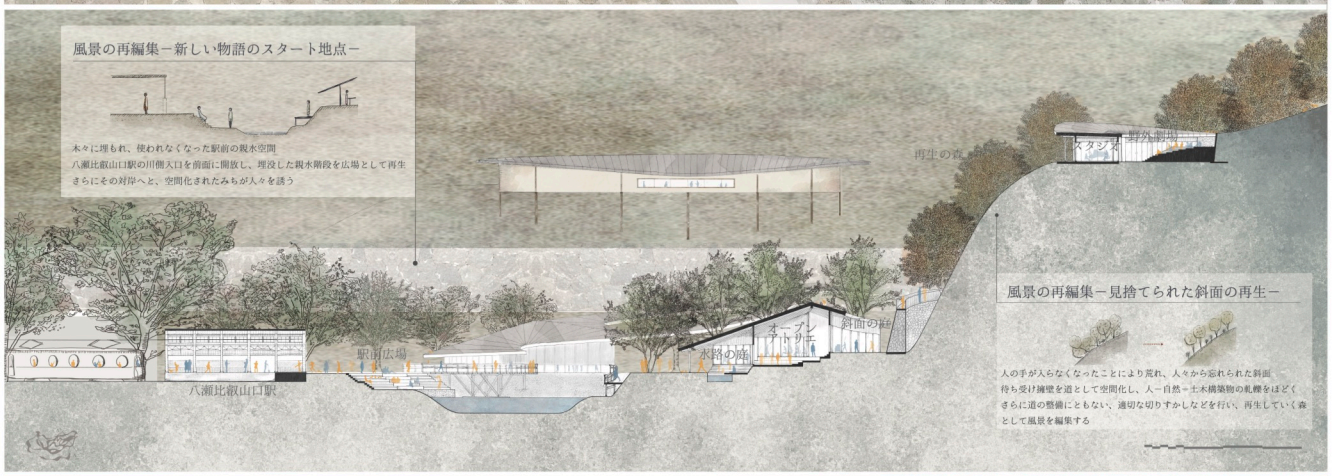


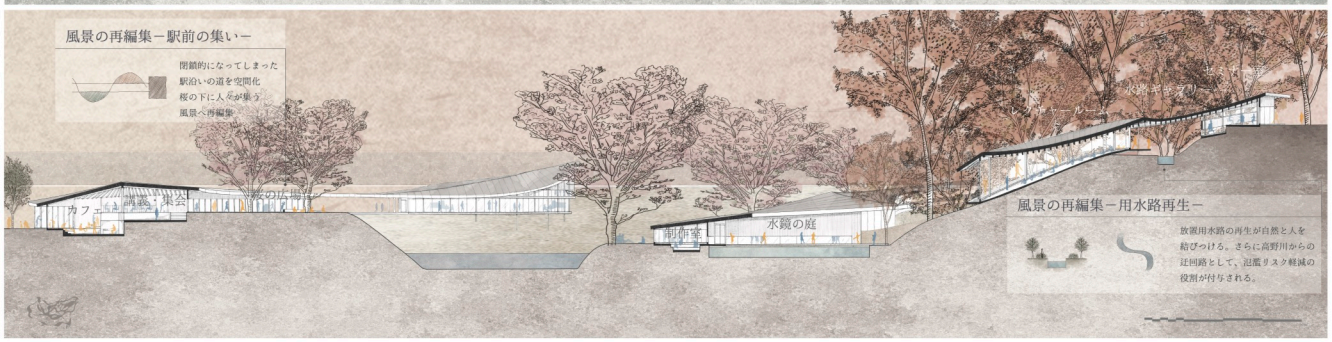






制作室
野外劇場
滝の広場
分かれ道の広場
水と緑の遊歩道
ライブラリー
レクチャールーム
駅前広場
八瀬比叡山口駅
水鏡の池
カフェ
集いの広場
桜の広場
映像室
風景プロジェクト
施設駐車場


風景の再編集－新しい物語のスタート地点－
木々に埋もれ、使われなくなった駅前の親水空間
八瀬比叡山口駅の川側入口を前面に開放し、埋没した親水階段を広場として再生
さらにその対岸へと、空間化されたみちが人々を誘う
再生の森
スタジオ
野外劇場
八瀬比叡山口駅
駅前広場
水路の庭
オープンアトリエ
斜面の森
風景の再編集－見捨てられた斜面の再生－
人の手が入らなくなったことにより荒れ、人々から忘れられた斜面
待ち受け擁壁を道として空間化し、人－自然－土木構築物の乱雑をほどく
さらに道の整備にともない、適切な切りすかしなどを行い、再生していく森
として風景を編集する

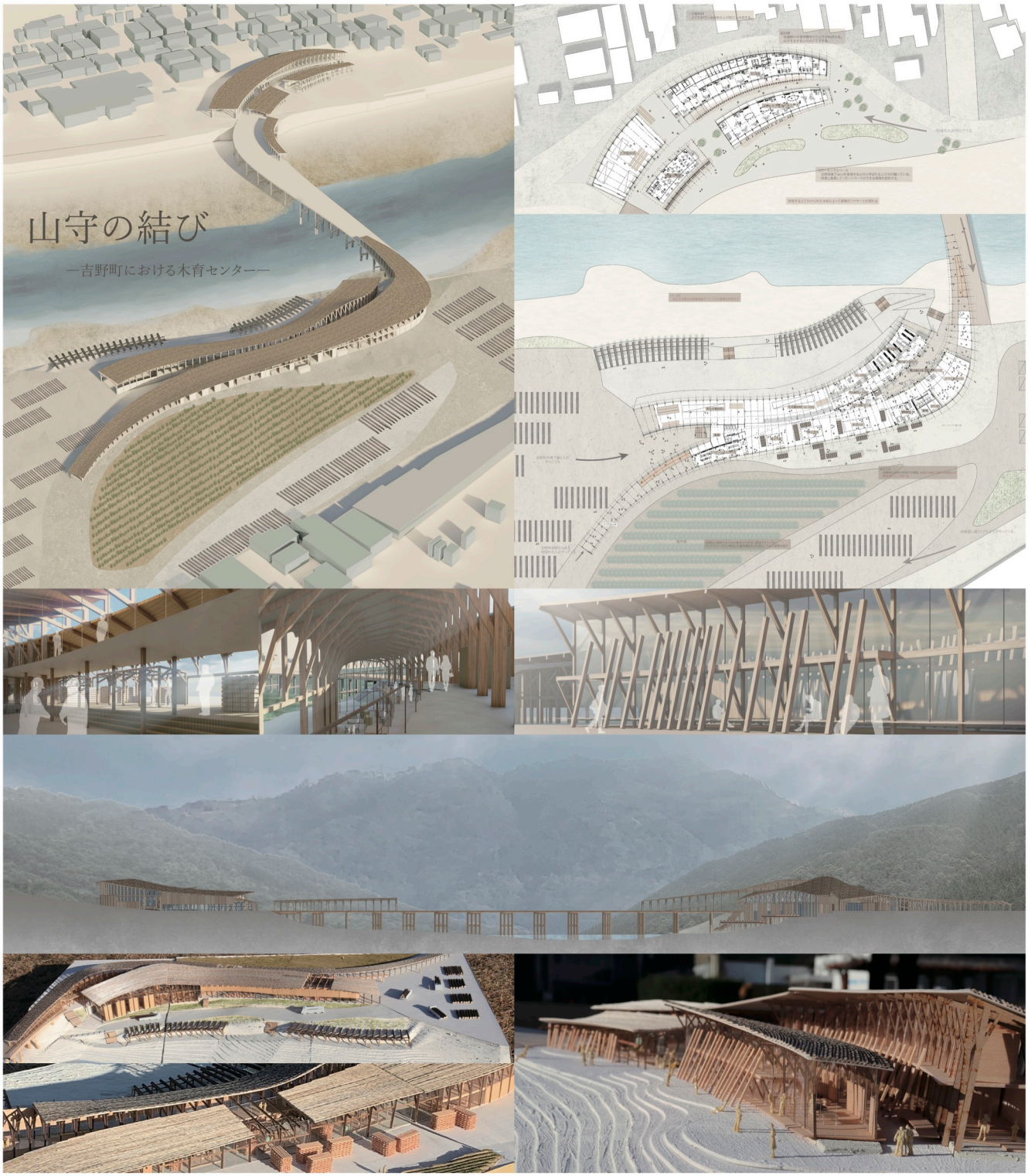

風景の再編集－駅前の集い－
閉鎖的になってしまった
駅沿いの道を空間化
桜の下に人々が集う
風景べ再編集
カフェ
講義・集会
桜の庭
制作室
水鏡の庭
水路オープンアトリエ
風景の再編集－用水路再生－
放置用水路の再生が自然と人を
結びつける。さらに高野川からの
迂回路として、氾濫リスク軽減の
役割が付与される。

神戸大学建築卒業設計賞 優秀賞

山守の結び
―吉野町における木育センター―

加藤千悠（槻橋研究室）

吉野林業地域で育った原木は吉野貯木場に運ばれ、製材される。現在、山を管理する山守の減少により林業が衰退し、貯木場に活気は感じられない。また吉野川により林業の場と生活の場が分断されている。そこで林業とまちの分断を解消し、双方の架け橋となる建築を提案する。両岸に製材所を中心としたコミュニティーの場を広げ、製材途中の木材を集いの場の構成要素として用いることで、製材の場が林業関係者と地域の人が交流する場になり得る。木育を展開することで地域の人や吉野材に興味のある人が集まり、この場所を起点に林業が再興していく。

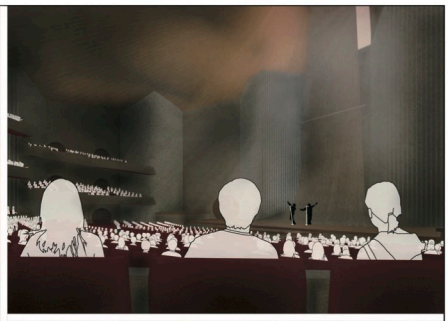


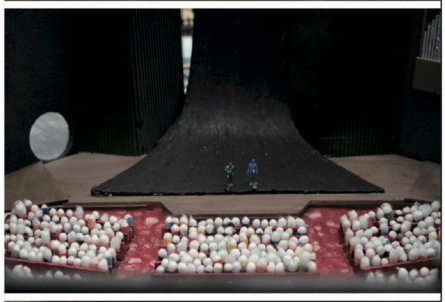
神戸大学建築卒業設計賞 優秀賞

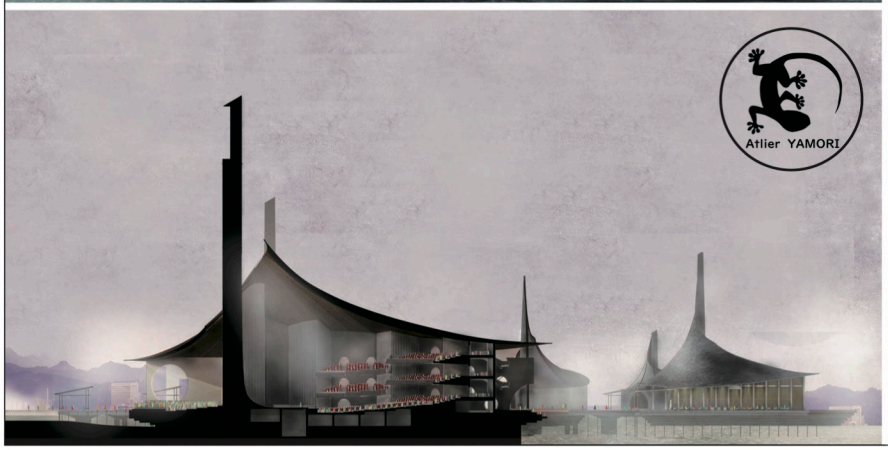
帆柱を見上げて
―港町兵庫津 海の音楽拠点―

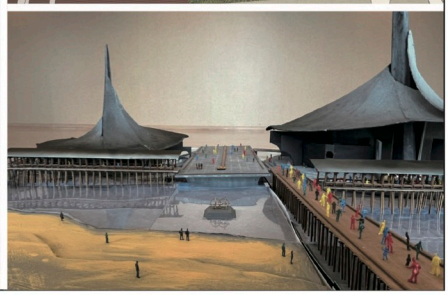
舟木健太郎（山崎研究室）

大輪田泊以来、長らく港町として栄えてきた兵庫津。しかし、近代化以降、沿岸部には造船所が立ち並び、街は海から切り離されてしまった。消えた街の誇りを取り戻すにはどうしたら良いのだろうか。「知らないとなりの人との一体感」という点で、劇場空間と、街への誇りは非常に似ていると考えた。かつて港に立ち並ぶ帆柱のような光景を目指し、そしてその柱が、舞台の後ろにそびえ、舞台の上での出来事と、街の生活を結びつけていく。無くせない生きる誇りを、柱に込めて。









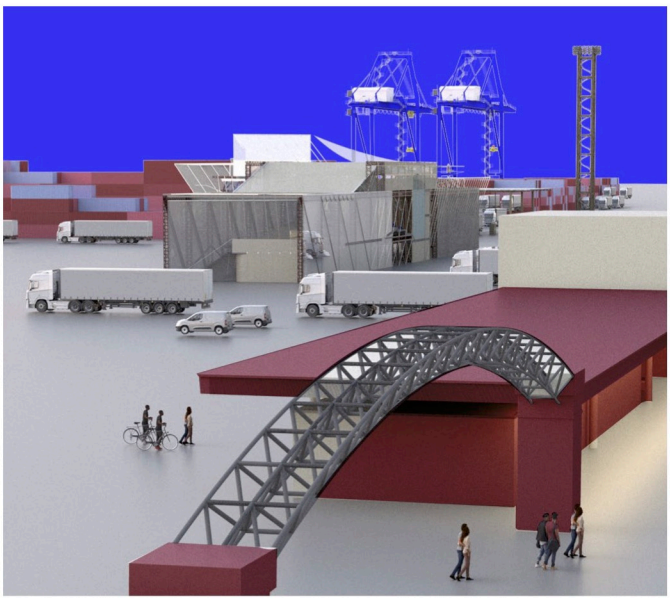
早生のしま、フラジャイルな建築

- 夢洲コミュニティに基づいた公共空間の設計提案 -

郝時節（光嶋研究室）

2025年大阪万博の開催とともに、大阪湾の夢洲という埋立地は注目が集まっている。大阪湾の人工造成地に、永続的なコミュニティを生み出す建築を提案した。

これまでの湾岸エリア開発計画では虚構的なテーマパークと現実的な物流倉庫から構成され、公園の永続性が担保されていないが、物流エリアでは文化は形成されない。その間にある現シャーシプールの敷地に透明なチューブを挿入し、両方のメリットとデメリットをマジックリアリズムの手法を用いてぶつけ合わせながら共存させ、フラジャイルな関係性が得られる。



紅椿 鷺はすだき 湯はつきず

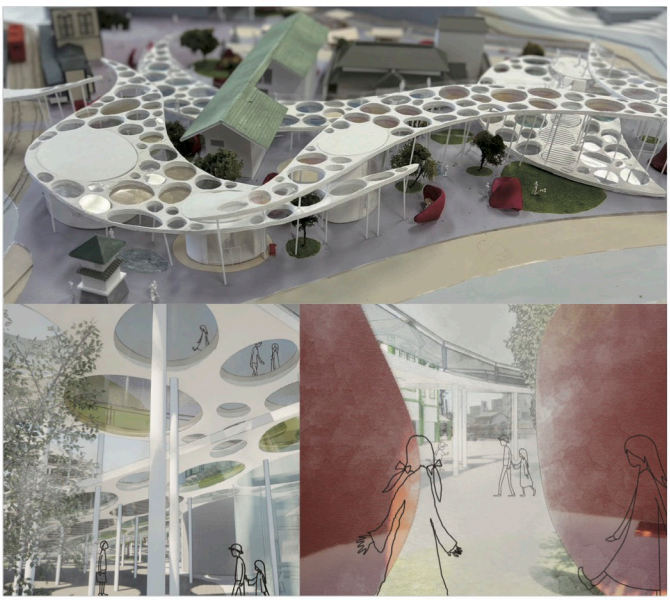
－道後の今昔を繋ぐ駅前広場－

小松紀亜（中江研究室）

道後温泉で有名なこのまちは現在、様々な要因によって人々からその魅力との出会いを遠ざけている。

その様子が顕著に表れた、道後のまちの玄関口である道後温泉駅前に駅前広場を計画し、道後公園をはじめとする、道後を訪れる人々から切り離されがちな魅力たちをアートを介して繋ぎとめる。

白鷺や椿など、この地ならではの要素から構成されたこの広場で、道後の歴史文化を継承しながら新しい形でのまちとの寄り添いを生む。



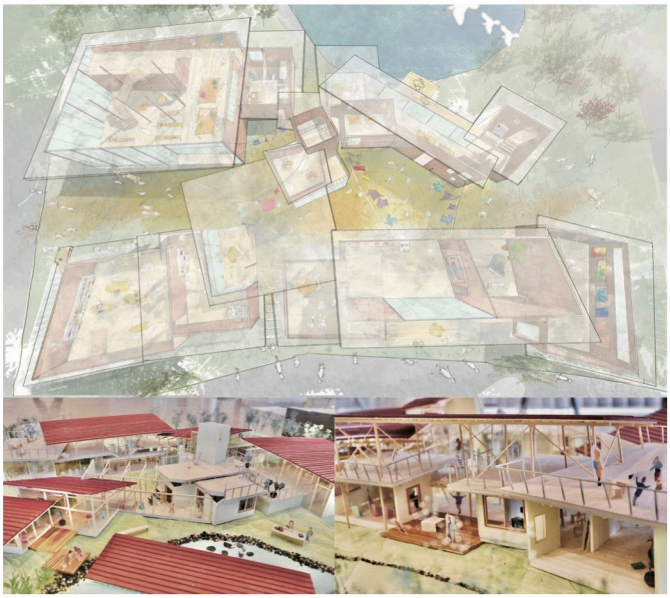
みんなで彩る、もうひとつの居場所

- 生きづらさを抱える子どもたちに寄り添う建築空間の提案

椎原知子（光嶋研究室）

身近に、不登校になった人がいる。規則的で集団行動を強いられる学校に馴染めず、人間関係のトラブルをきっかけに不登校になった。多感で傷つきやすい子どもたちを守るためには、家と学校以外の場所に逃げ込める場所を作らなければならない。そこで私は小中学生のためのフリースクールを提案する。

子どもたちはここで友達や大人に出会い、コミュニケーションを少しずつ重ねることで心が解れ、回復していく。



起伏のしろ

－山城の空間特性を用いた文化複合施設の提案－

落合洸介（末包研究室）

山城、そして里山と、時代に応じて人々と共生してきた山における、これからのかかわりしろとなる文化複合施設を提案する。その際に、地形の起伏によって領域を創出する山城の空間特性をヒントに設計する。

大小様々なスケールの起伏によって、空間が連続しつつも緩やかに分節する。

床や天井の曲面と、プログラムの性格に応じたヴォイドの組み合わせによって様々な起伏が生まれる。例えば光の入り方や音の響き方、人々の関係性や外の見え方の起伏によって少しずつ性格の異なる居場所を作り出す。

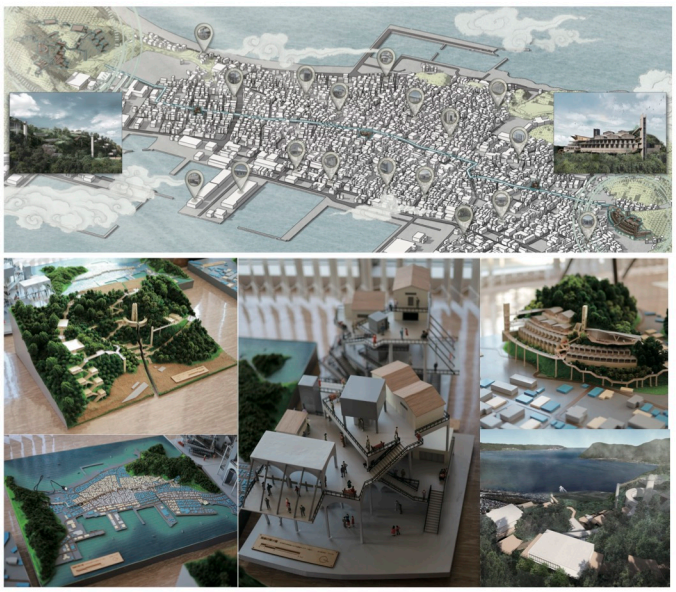
海郷の架け橋

－串本町中部地域における避難ネットワーク拠点－

劉亦軒（栗山研究室）

和歌山県南部にあたる串本町の中部地域の東西両側が海に面し、南北の両側が山に面している。約4000人が住んでいるこの地域の地形は砂州であったため、南海トラフ巨大地震が発生すると必ず液状化現象が起き、木造家屋のほとんどが全壊するとされる浸水深さ3.0m以上の範囲が広く分布し、最も多くの津波避難困難者の発生が想定され、町自体が消えてしまう可能性も考えられる。

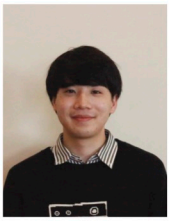
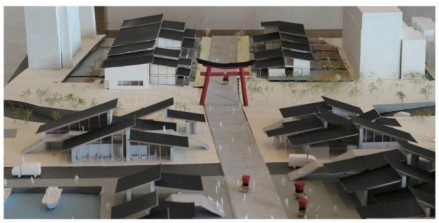
そのため、これらの問題を全般的に考慮し、人々の安全を確保するための串本避難ネットワーク拠点、すなわち、この建築によるシステムを構築することが必要である。



神戸大学卒業設計 作品紹介

海との邂逅
—垂水 海神社の文化の継承—

大中吾一（山崎研究室）

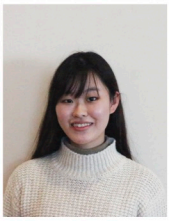



よるべ
—有機の里いちじまと移住者の結び目—

天谷貴仁（山崎研究室）

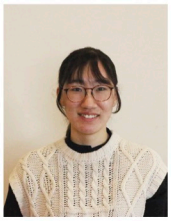
ニナイテ・イン・レジデンス
—京都・祇園祭における都市祭礼の継承—

安念玉希（栗山研究室）



大地に編み、街を紡ぐ
—新神戸駅再生プロジェクト—

松森梨佳子（栗山研究室）

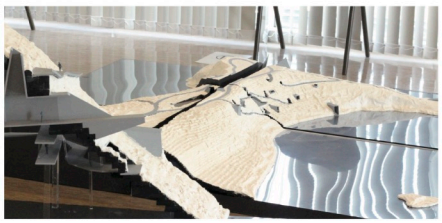


緑を編む
—大阪内湾に生まれるサンクチュアリ—

成川純平（槻橋研究室）

津軽三重奏
—津軽三味線から広がる音楽のアーティスト・イン・レジデンス—

梶山彩花（槻橋研究室）

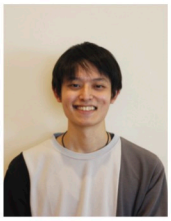


風待ちの間に
—神戸市塩屋町における心の休息所—

徳山さき（栗山研究室）

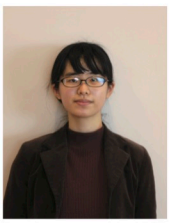
CREATIVE GEAR
—「ものづくりのまち」浜松における学習創造拠点—

德枡謙輔（末包研究室）



集い、めぐり、彩るいえ
—大阪・城北わんどとともに—

武内綾香（山崎研究室）



ゴーストプレイスの再編
—鬼怒川温泉廃墟ホテル群の再活用—

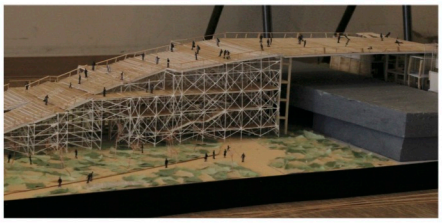
谷口翔一（槻橋研究室）

つくしのくに いこひのむろつみ
—歴史と今を重ねる史跡公園—

橋本さほ（中江研究室）

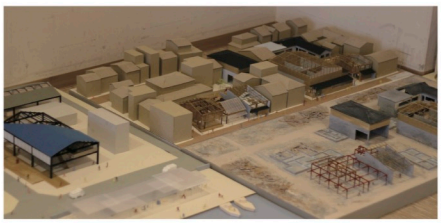
天の浮橋
—都市軸の再生に伴う住吉地域の再定義—

堀川奏太（槻橋研究室）



福良の拠、紡ぐ日常

松本海音（近藤研究室）

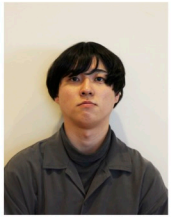


逢ふ日
—救いのきっかけとしての古本ライブラリー—

武波彩代（槻橋研究室）

tomarigi
-VANLIFEを支える拠点の提案-

谷大地（近藤研究室）



IN RUINS
- 動線の復元と新設による軍艦島の歴史継承計画

北脇知花（光嶋研究室）

遊び、学び、、交わり、、、

長尾元輝（近藤研究室）

子育て商店街
—西宮市における見守りの拠点—

島田美穂（栗山研究室）

審査講評

山崎寿一
神戸大学大学院教授　審査委員長

2022 年度の建築卒業設計賞の審査は、2023 年 2 月 18 日（土）に神大会館六甲ホール（設計：狩野忠正神戸大学名誉博士、建築学科 10 期生、1962 年卒業）で、卒業設計発表会に引き続き開催された。卒業設計賞は1998年度にスタートし、2012 年度に現在のような公開審査方式になったので、今回は 24 回目となる。

選考会は、卒業設計関連の内規に従って、昨年度同様の手順で、卒業研究（設計部門）発表会後の審査委員の投票（4作品選出、2作品2点、2作品1点の合計）で選出された上位9作品を候補として選考会が開催された。選考会では審査員が1作品を選び、順位を決定するが、今年は首位が同点で2作品となったので、建築大賞に長央君（光嶋研）と宮本君（末包研）の2作品、優秀賞として加藤君（槻橋研）が決定。第1次投票で4位が同点だったので決戦投票が行われ舟木君（山崎研）が優秀賞、郝君（光嶋研）、小松君（中江研）、椎原君（光嶋研）、落合君（末包研）、劉君（栗山研）の5名は計画系表彰の佳作となった。発表会後の1次審査（複数選択）結果の上位4名と最終受賞者4名は同じ顔触れだったが、選考会の質疑を経て行われた選考会1次投票（1作品選定）の順位とは異なっていた。それだけ接戦だった。これら卒業設計賞の候補作品は、卒業判定会議で卒業要件をクリアしたことを確認後、教室会議で正式に各賞に決定した。

審査委員からの質問は、貴重である。審査委員はそれぞれの研究分野・専門分野や個人の建築観、作品に対する着眼点が質問に表れる。また候補者の回答には、質問の本質を的確に受け止め、自分の考えを発信する力量が現れる。なかに愚問と思われる発言もあるが、それも力量である。選考会はそれまでの努力を加味せず、作品・模型と質疑で判断するのだが、投票結果を見ると、建築空間デザイン力を判断基準とするもの、環境との対応、プログラムと建築空間の対応に着目する建築環境デザイン力を判断基準とするもの、その両方のバランスに配慮するものに分かれる。また建築の社会的芸術性や社会性、建築観に重きをおくもの、建築志向（好き嫌い）も判断に左右する。（どの審査員が誰に一票を投じたかは推測できる）

今年の大賞受賞の2作品は、長央君は建築空間デザイン力（空間派）、宮本君は建築環境デザイン力（環境派）において秀逸であった。この2名は2年、3年の設計課題でもトップランナーで、いわば本命の二人だった。私としては4年の一年での成長、設計演習とは異なる次元の作品を期待したが、衝撃は少なかった。長央君は大谷先生からのコメント、宮本君は八木先生や中江哲先生、向山先生からの質疑の内容を糧に、異次元の自分を目指して頑張ってもらいたい。能力は保証する。優秀賞の二人は、当日会場への一番乗り、二番乗りだった。その気概が、卒業設計の作品・模型に表れていた。多分数日前にカタチがまとまった愛しい分身が卒業設計の作品だったのだろう。佳作となった5作品は、どこかに魅力があった。訴え伝わるものあったからこそ審査員が票を投じた力作だった。しかしどんな審査員がどこを評価してくれたのか本人が自覚できていない質疑の回答で残念さが残る作品でもある。

今年も、多くの非常勤の先生方には熱意ある審査・コメントをいただいてきた。この場をお借りして謝意を表したい。来年度からカリキュラムが大きく変わるので設計課題も新たな体制になる予定である。本来ならたっぷり時間のとり、議論を戦わせて選考するバトルとなればよいのだが、時間に限りがあり形式審査となりがちである。課題も残るが、今後の発展に期待したい。学生の可能性を摘み取ってはいけない。卒業設計をやり遂げた今、新たに見えた景色があるはずである。その景色がこれらから目標に繋がる。すべて学生の今後の成長に期待したい。

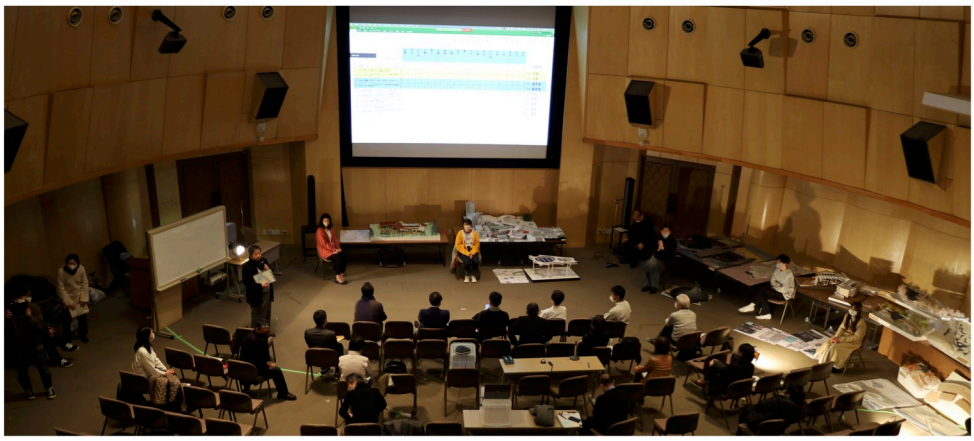
選考委員

山崎教授を審査委員長とし、選考会選考委員は計画系の教授 4 名（近藤、末包、中江、山崎）と、准教授 3 名（栗山、光嶋、槻橋）、ならびに選考会参加を受諾いただいた非常勤講師 12 名（山隈直人、深川礼子、鄭弼溶、竹口健太郎、小幡剛也、本田孝子、中江哲、吉武宗平、八木弘毅、大谷弘明、向山雅之、近井務）の計 19 名とした。選考会はこの 19 名で行われた。

選考会得票数一覧

氏名	卒業設計題目	第1回得票数	第2回得票数	最終結果
長央尚真	堂々たる撞着 – 港湾倉庫のコンバージョンによる公共図書館の設計提案	5		大賞
宮本莉奈	地跡を縫う ―忘れられゆく風景を再編集するフィールドキャンパス―	5		大賞
加藤千悠	山守の結び―吉野町における木育センター―	3		優秀賞
舟木健太郎	帆柱を見上げて―港町兵庫津 海の音楽拠点―	2	10	優秀賞
郝時節	早生のしま、フラジャイルな建築 – 夢洲コミュニティに基づいた公共空間の設計提案	2	9	佳作
小松紀亜	紅椿 鷺はすだき 湯はつきず ―道後の今昔をつなぐ駅前広場―	1		佳作
椎原知子	みんなで彩る、もうひとつの居場所 – 生きづらさを抱える子どもたちに寄り添う建築空間の提	1		佳作
落合洸介	起伏のしろ ―山城の空間特性を用いた文化複合施設の提案―	0		佳作
劉亦軒	海郷の架け橋–串本町中部地域における避難ネットワーク拠点–	0		佳作

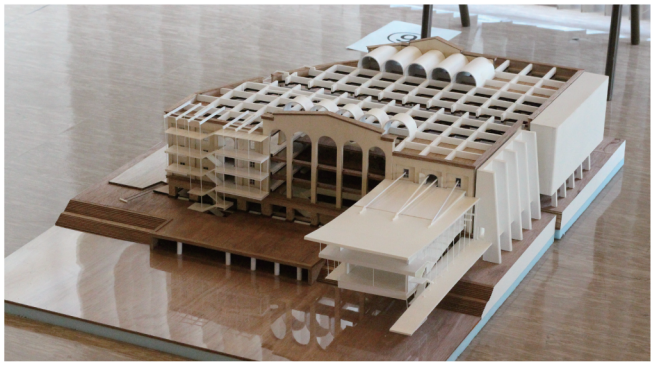
■卒業設計発表会の様子



作品講評

大賞

堂々たる撞着
— 港湾倉庫のコンバージョンによる公共図書館の設計提案 —
長央尚真（光嶋研究室）



敷地、プログラム、デザイン、表現すべてに過剰なまでの「操作」に対する意識がちりばめられた作品である。例えば敷地における、現在の敷地状況ではなくあえて 10 年以上前の敷地の周辺環境を使うという時空を超えた編集作業。あたかも音楽家がスタジオに籠ってミキシングコンソールを駆使して作曲しているような姿が目に浮かぶ。

この建築が社会性を獲得しているのかという疑問に対しても「果たして現在、社会性を目指すべきか」という問いかけを持って答える姿勢が図面から感じ取れる。そこに希望とともに一抹の不安を覚えるのだが。。。

この空間にもヴェンダースの天使が舞いおりてくれることを願っている。

審査委員　中江哲

大賞

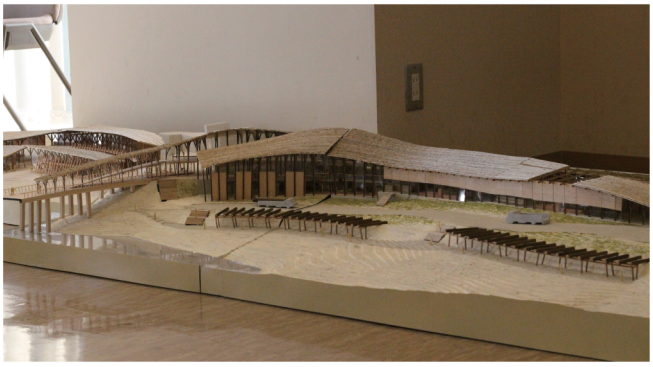
地跡を縫う
— 忘れられゆく風景を再編集するフィールドキャンパス —
宮本莉奈（末包研究室）

京都の市街地と比叡山の山間地域を再接続する提案である。薪炭の生産・電力・観光といった自然の力を活かしたかつての営みを、レストハウスや大学サテライト・セミナーハウスといった活用を促すプログラムへ書き換え、景観の再編を試みた作品である。道・水路・建物の跡（「地跡」）を手掛かりに土地利用の歴史を読み解き、道の再生により「地跡」を再接続し、鉄道駅とケーブル駅を結ぶ経路を、単なる通過動線としての道から豊かな空間体験を生む場所へ転換している。人が利用する施設である建築（屋根・柱・壁・床）や土木（擁壁・橋・水路）の要素を山林や河川に対し注意深く配して人と自然を近づけ、自然の恵みに気づく学びの場となっている。提案した場所が、人に利用される以前の原風景はどうだったか？そして、提案した施設の配置により、どのような価値が生み出され変化していくのか？長い時間軸で人と自然の関係を考えるきっかけとして欲しい。

審査委員　向山雅之

優秀賞

山守の結び
— 吉野町における木育センター —
加藤千悠（槻橋研究室）



建築の形が敷地の文脈（文化的な意味をも）をよくとらえている。木造の軸によって作られた空間が、屋根の滑らかな3次元曲面を形成し、自然に風景と起立しながらも透明感を獲得し馴染んでいるが印象的である。建築があることによって、両岸が橋渡しされ、木や人が行き来するだけでなく、ヴォリュームが複雑に窪むことによって、風景への複雑な視線や場所、そして人と木と川の関係が重層的に発生するような空間を設計する手腕が秀逸であった。

審査委員　竹口健太郎

優秀賞

帆柱を見上げて
— 港町兵庫津 海の音楽拠点 —
舟木健太郎（山崎研究室）

朝日を背景に黒々と浮かび上がるシルエット。北前船というよりは黒船あるいは軍艦のような、異様な存在感を放つ力強い造形。群をなす帆柱をモチーフに、時空を超えて兵庫津という場所の力を喚起しようとする意図が読み取れる。安易に既存の文脈に沿うのではなく、敷地の調査・観察の末に独自の飛躍を遂げた挑発的な作品であり、神戸の全く新たなウォーターフロント風景としての可能性を感じさせる印象深い作品である。

審査委員　吉武宗平